

Title	オスマン・パシヤの横濱へ上陸する迄
Sub Title	
Author	内藤, 智秀(Naito, Chishu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.4 (1929. 12) ,p.15(523)- 30(538)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オスマン・パシャの横濱へ上陸する迄

一八八九年（明治二十二年）七月十五日土耳其帝國の使節エミン・オスマン・パシャ（Emin Osman Pasha）が、其本國を船出して、途中幾多の困難に遭遇し、終に翌一八九〇年（明治二十三年）六月七日横濱へ入港し其の使命を果したが、歸途紀州沖で死歿して了つた事は周知の事實である。然し右使節が吾が國に來朝する迄の經緯については、日本其の他歐米に於てもよく世間に傳へられて居ない様に思ふので、今オスマン・パシャの手記、土國海軍省文書、墺國人の日記其の他當時の各地新聞記事等によつて簡単に之れを綴つて見たいと思ふ。

土耳其軍艦エルトグロール（Ertgrul）（註一）の日本派遣問題は、確かに土耳其威發揚の一端を示すものである。と同時に右は土耳其側としてはア卜ドル・ハミッド二世（Abdul Hamid II）時代に於ける不祥事として永く土國人の念頭を脱する事の出來ない一事件でもあつた。即ち土耳其は之により五百三十八人（註二）の將卒の生靈を失ひ、貴重な土耳其の軍艦を極東海底の藻屑と消えさせて仕舞つたのである。

つた。然し當時日本が其の生存者を態々金剛比叡の二艦に乗せて、土耳其本國に送還した事は、吾が國の美しき眞情の吐露として、又長く兩國國交上の記念すべき出来事として、殊に土耳其國民にとつては永久に忘れる事の出來ない感謝の念を遺して居るのである。

オスマン・パシャを日本へ派遣せる計劃は、土耳其帝アズドル・ハミッード二世及び當時の土國海軍大臣たるテネドス (Tenedos) 生れのハッサン・フスニー・パシャ (Hassan Husni Pasha) 其の他土耳其帝の顧問役であつた汎回教主義者ゼマエル・ヒド・デーン (Djenal-ed-Din) によつて企圖されたのであつた。

丁度一八八九年(明治二十二年、土耳其曆一三〇五年)二月一日、土耳其首相キヤミル・パシャ (Kiamil Pasha) の名によつて、左の文書が土耳其に於て發表され、又た遠洋航海の計劃は土耳其の閣議及び最高會議に於て既に決定せる旨も公布された。

『陛下の恩召により、土耳其实業學校の卒業生は、更に其知識を磨き、廣く海外の事情に通ずる事を必要とす。其の既に習得せる理論を實地に應用する事は極めて緊要の事なりとす。故に今回右の目的達成の爲めに海軍兵學校の卒業生を中心とし練習艦隊を組織し、印度支那及び日本に派遣する事とせり。出發の時期及び軍艦の選定につれては海軍大臣ハッサン・フスニー・パシャに一任す』(註三) と、右に對し二月二十六日附き海軍大臣ハッサン・フスニー・パシャは土耳其帝に左の通り上奏する所が

あつた。

『木造フリゲート（Frigate）型ヘルトグロール號は右航海の目的に適し、之れに要する各種の準備は既に完成したるを以て、四月初旬の出帆を以て最も適當と認め、艦長其他の乗組員等は追つて選定の上推舉すべし』（註四）

と云ふのであつた。其結果出帆期日は御裁可になつたが、それと同時に日本帝國に使すべきものは外國語に堪能なものを選定せらるべく旨をも首相の名に於て海相宛報告された。之れに對し海相は其女婿オスマン・ベイを選定し、右は外國語に精通するのみならず、海軍將校としての技能に長じ、過去の経歷に於ても、最も適任者なるべきを以て之れを任命した旨及び乗組員の人選についてもそれべく上奏したのであつた。

斯様にする内、時日は経過し四月になつても決行が出來なかつたので四月十七日附き、愈々右軍艦の出發期日はセケル・バイラム（Seker Bairam）（砂糖祭）（註五）の第五日目（後又七月十五日に延期する）に延期決定せる旨、及び其出帆當日までの間に總ての準備を完成すべしとの命令が士帝より下れる旨首相を經て海相に報告されたのであつた。

丁度此の頃、清新な微風が微笑を含んでマルモラ海上を滑つて居たのであつたが、ヨンスタンチノーブルにある海軍省附近のカフェーや茶屋、殊に有名なカフェー、トカトリーには入り代り立ち代り多數

の士官が出入して、何れも極東日本への遠洋航海に出掛ける事につき、多大の興味を持ち、笑ひ興じながら、貴き國家事業たる航海に旅立つ事の愉快さを大なる誇りを以て話して居たのであつた。當時右派遣の軍艦はアナル・テヴフィック(Anar Tevfik)であると云ひ振らすものもあつたが、其後右の誤りなる事も明り五月末になつてからエルトグロール號の派遣が決定せる旨も明らかに發表される事になつた。そしてそれと同時に右使節の派遣は一八八七年(明治二十年)コンスタンチノープルを訪ねて土耳其实に面會された小松宮殿下の御訪問に對する答禮である旨及日本天皇陛下に土帝の御親書と土耳其实の金剛石大勳位勳章とを捧呈すべき任務を帯びるものなる旨も附記され、且つ當年卒業すべき海軍士官候補生を乗せた所謂練習艦隊の派遣なる旨が發表になつたのであつた。

此のエルトグロールの決定及び使節の人選については、當時土耳其实海軍省内に異議を稱へるものがあつたので、其出發が上述の通り略三ヶ月間延期されたのであつた。即ちエルトグロール號決定に對する反対派の人々の言によれば、右エルトグロール號は長き航海に堪えざる老艦なる旨を述べるのであつた即ち同艦の機關長ハーテー・ベイ(Hearty Bey)は土耳其实海軍に働く英國士官であつたが、彼はエルトグロールの蒸氣釜は古く、且つ一時間八海里又は九海里以上の速力を出す事が出來ない事を海相に報告した。然し海相としては既に二月二十六日前述の通りエルトグロールが右の任務執行に適當なる旨を土帝に上奏し其の後御裁可も経て居たのであつたから、右機關長ハーテー・ベイをプリンキボ(Principe)

通ひの一小汽船に轉任を命じて自意を貫徹したのであつた。尙ほ使節の人選に對する反対は多くは感情論であつたが、海相が其の女婿を使節團長として推舉した事に對する反対論であつた。然し此種の議論は當時珍しくない事であり、而も其の何れもが多くは表面に現はれず形つけられた。即ち土帝アブドル・ハミッド二世の左右の者、特にゼマル・エド・デーンの耳に達した事もあつたので、土帝から海相宛軍艦の選定及人選につき充分注意すべき旨警告する所あつたが、「詳細の事實は遂に土帝の耳には達せず、土帝としてはエルトグロール試運轉の結果の報告を待つて居られたが、海軍機關士も亦造船技師も海軍大臣の意思に反してまで、軍艦の缺點を指摘しようともしなかつた。」(註六)

今此のエルトグロールの艦歴を述べると、同艦は一八五四年(安政元年)コンスタンチノープルの造船所で建造せられ、出帆の當時既に三十五歳の艦齡に達して居た。一八八八年(明治二十一年)一度修繕されたが、然し右は只だ木造の部分を改造したに過ぎなかつた。汽罐や蒸氣釜は總て英國製のもので右は其儘別に改築されなかつた。長さ二五〇呎、幅五〇呎、深さ二五・六呎(吃水)、排水量二三四四噸(註七)であつた。尙ほ其の汽罐は六百馬力で、その石炭庫には四百五十噸の石炭を容るゝに足り、同艦の速力十海里であつた。即ち外觀は立派であつたが其堅牢の點に於ては幾分缺點のあつた由傳へられた。其の武装の方面を見るにクルップ砲(十五サンチ)八門、アームストロング砲(百五十リブル)五門クルップ砲(四磅)二門、同(三磅)二門等でホチキス、ノルドフェルド、ロケット等及び水雷の設備

電燈の設置其の他一百個のヘンリー・マルテン式銃と一百個のワインチエスター式銃、四十個の短銃等もあつた。

其の乗組員としてはエミン・オスマン・ベイが司令官で同時に使節團長であり、又日本の天皇陛下に獻上すべき金剛石大勳位勳章の贈呈の任務をも帶びて居た。彼は露土戰爭の際に於けるシノーブ (Sineope) 海戰の勇將オスマン・バシャの孫に當り、一八五九年(安政六年)(註八) コンスタンチノープルに生れ、一八七〇年(明治三年) 海軍兵學校に入學し、一八七七年(明治十年) 海軍士官候補生として軍艦レスモ (Resmo) の乗組員となつた。一八七九年(明治十二年)には副官となり、その父と共に波斯灣口バスラ (Busrah) に赴任し、翌年には土耳其裝甲艦オスマン (Osman) の砲術長に任命され、一八八二年(明治十五年)には練習艦フダヴェンデキアル (Hudavendekiar) に教官として乗り込み、翌年海軍大尉に昇進して、巴里に於ける土耳其大使館附海軍武官となり、五ヶ年の後歸朝して少佐となり、一八八六年(明治十九年)には二十八歳を以て當時の海軍大臣ハッサン、フスニー・バシャの娘と結婚した。其結婚の年、海軍省の用命によりブカレスト (Bucharest) に向ひ、明治二十年には、彼は土帝の特別の恩召により中佐となり、明治二十一年直ちに大佐に昇進したのであつた。

尙ほ同艦の乗組員としては總員六百七人(註九) で何れも土耳其帝國海軍の優秀なもののみであり、内士官は機關部軍醫主計等を合せて三十六人で外に十五人の候補生が乗つて居た。

一八八九年（明治二十二年）七月十五日は月曜日であつた。此の日エルトグロールは市民及び多數軍人に見送られながら型の如き儀式があつて錨は上げられた。極東への永いく航海のスタートは切られ金角灣頭雜鬧の巷と化した。其の後時日は経過した。普通市民の念頭からエルトグロールの名さへ消え去つた位、其の消息を語るものも稀であつた。

が丁度七月三十一日突然エルトグロールから海軍省宛の電報があつて、又々市民に一の衝動を與へたのであつた。それはエルトグロールがスエズ運河の砂洲に乗り上げ、其の舵を破損し船中は水を以て浸されたといふのであつた。其原因は水路案内者の過失によると云はれたが、運河管理の規則上この水路案内者に依頼しなければならなかつたのであつた。

當時土耳其海相の意思としては、「船の損害個所修繕の爲めに、之れをドックに入れる時は長時日を要し、太平洋航海のよき季節も経過すべきにより、司令官オスマン・ベイに二三人の士官をつけて他の客船に便乗させ、エルトグロールの極東航海は之れを中止した方がよからう」（註一〇）と云ふのであつた。

之れに對し土耳其帝及び其の周圍の者は反対して居たが、丁度其の後數日エルトグロールからの來電によると、舵は破壊せるに非ず、只だ幾分曲つたのみであるから其の修理は短時日に於て完成すべく、隨つて豫定の航海を繼續することが出來ると云ふ事であつた。當時土耳其帝は其の侍従を海相に送り、この後は同艦の行動につきその都度詳細に報告をなさしむべしと命ずる所あつた。

斯様にして右の修繕は八月十八日ドックに於て着手され十二日の後完成した。然るに土國政府からの返電を待つた事や又た其の他の諸用の爲め九月二十四日になつてから、始めてスエズを出帆したのであつた。

スエズに長滯在した理由については土耳其實の史料によると鮮明を缺く點もあるが、當時土耳其實に駐在して居た奧國の武官であつたギースルの日記によると、右は費用の缺乏に原因したと述べて居る。即ち彼は「エルトグロールの航海は喜劇で始まつて悲劇に終つた。同艦がポートサイドに長滯在したのは運河通過の料金を所有して居なかつた爲めであつた。幸埃及にある土耳其實代表委員が右を支拂つた爲めに同艦は無事新嘉坡に向つて航海を続ける事が出來た。新嘉坡でも同艦は其汽罐を修理しなければならなかつたが、軍艦の入港に必要な禮砲の爲めの火薬を遺して居なかつたので是等の打ち合せの爲め數週間を費したのであつた。」(註一)云々、と隨分思ひ切つた書き方をして居る。

こんな風であつたから同艦がデニッダ經由アデン港に到着したのは十月七日であつた。アデンには三日間の滯在の後十日其地を出帆し印度洋經由十月二十日孟買へ入港したのであつた。

一行が孟買滯在中の事は此地發行のグヂヤラチー語の新聞及び英字新聞の記事によつてよく之れを窺ふ事が出来る。即ちグヂヤラチー語の新聞によれば、

「土耳其軍艦エルトグロールは十月二十日孟買へ入港した。土耳其兵士が立派な服装で懲勸な態度を以て上陸して來た時は一同驚いた。是等の兵士は何れも金曜には回教寺院に參詣したので、印度市民は大に尊敬を拂ふと共に其土耳其軍艦なる事を一般に知るに至つた。一般市民が軍艦見物の爲め押し寄せるので船中の雜沓著しく、吾が新聞社長の同艦を訪問せる土曜には甲板上の歩行さへ困難な位であつた。

(中略)特に注意を惹いた事は土耳其軍艦は他國のそれと異り印度市民回教徒拜火教徒の別なく、何等祕する所なく、悉く軍艦内を見物せしめ、其の將卒の態度極めて鄭重で英國の兵士と何等異なる所がない。彼等は心付け其の他の贈物を取らす、印度の回教徒をして親しみの情を起させ多大の感激を惹起させたのであつた。蓋し英土同盟は土耳其を益する事甚大なるものあるべく、回教徒は總じて英國の爲めに進歩し又幸福である」(註一一)と、

又英字新聞によると、

「今日孟買の海岸に土耳其國旗が翻る。それは外國の各港を訪問して先週此所へ入港して來た土耳其軍艦の國旗である。同艦は來週日本へ向け出帆の豫定であるが、土耳其軍が一八七七年の露土戰爭に於て至る所に大勝を博し、功蹟を擧げた事は皆人の知る所である。ホーバルト・バシャは曾て云つた事があつた。「土耳其人は獅子の如く勇敢に而かも小羊の如く柔順である」と。今此の種土耳其軍人は此のエルトグロールなる軍艦中に勤務中である。同艦の司令官は土耳其帝の副官たるオスマン・ベイ大佐である。

艦内には五百五十人の兵卒三十人の士官十五人の機關士、あり（中略）兵卒は服装が立派で萬事はよく整頓して居る。兵士は何れも元氣で仕事を樂しみ其の赤帽は特に注意を惹起する。船中は何等隠す所なく悉く之れを多數の參觀者に見物させた。孟買聯隊長グロセスターは土國士官及び在孟買土耳其領事カトリ・ベイをカラベに招待し英國士官はよく土耳其人を歡迎し、クリミヤ戰爭以來の英土親善關係を示し、宴會は夜二時迄續いた。土耳其軍艦の孟買訪問は印度にある回教徒に對し多大的好印象を與へ兩者の親交一層の度を加へた。即ち金曜に於ける土耳其兵百五十人の回教寺院參詣の行列に多數の市民は其の後ろから續いた。

即ち土耳其軍艦孟買滯在中は秩序整然一の警察事故を出さず一人の酒醉を見なかつた。若しグラットストーンが之れを見たならば定めし彼は満足する事であらう。在來土耳其人は惡口の的となつて居たが今目前に之れを見るに全然其の反對なる事を知る。最後に土耳其將卒の教養と其の態度の立派なる事及びオスマン・ベイ以下の士官の監督の行き届きたるを賞揚し其の將來を祝福するものである（註三）と、

斯様に印度の王族及び回教の高僧は何れも土耳其使節一行を訪問し敬意を表して印度回教徒は土耳其將卒と共に相抱擁した位であつた。即ち土帝アブドル・ハミット二世が回教主としての權威を示す爲めに印度の回教徒をして其祈禱の際に於てカリフの名を呼ばせるに至れる程回教宣教師をして、布教さして居た事が此所に其の效果を見る事が出來たのであつた。

エルトグロールは十月三十日孟買を出帆し十一月二日古倫母に投錨した。此の地へ碇泊三日間の後新嘉坡に向つて航行を續け十一月十六日無事新嘉坡へ到着したのであつた。十一月二十二日オスマン・バシャから、土國海軍省宛の通信によれば、「エルトグロールは古倫母より新嘉坡へ航行し、マラッカ海峡に於ては烈しき暴風にあつたが幸無事目的地に到着した。思ふにアーブドル・ハミッド二世の現代は回教史中最も光輝ある時代である。即ち最も名譽ある土耳其國旗が太平洋を航海する土國軍艦に翻つたのは此時代である。土耳其國開闢以來始めての試みたる大遠洋航海に於て沿岸各地の回教徒は、何れも誠意のありたけを以て吾人を歓迎し古倫母に於ても市民は城内より歓迎の祝砲を發射し。船を見物の爲めに來訪するものは何れも將卒と相抱擁する有様で、古倫母だけでも回教徒の來客二萬人に達した。尙ほ新嘉坡に於ける市民の歓迎は孟買及古倫母以上であつた。此附近の回教諸小國の王及大人物は勿論スマトラジャワ等の遠隔の島々からも態々吾が軍艦に來訪するもの甚だ多く、彼等は何れも土耳其帝及アラーの爲めに祈禱をなし軍艦に對しては何れも接吻した。爲めに却て外國人をして嫉妬させた位で新聞は「是れは愛に非ず崇拜なり」と記載した位であつた。金曜に於ける回教寺院内の祈禱は土耳其帝の爲めにせられ、新嘉坡知事は土耳其將校の歓迎會を開催し、「吾人は全回教徒と共に誠心誠意親和せんが爲めに努力しつつあるものである」と述べたのであつた。」(註一四)云々と。

尙ほオスマン・ベイは新嘉坡到着の十一月十六日附けて以て將官となり爾來バシャの稱號を許された

が、土耳其本國に於ては海相の斡旋によりオスマン・バシャ一行は氣候及風波の關係其他石炭食料或は船體修理の關係により、本隊は新嘉坡に於て休養し、オスマン・バシャは二三士官と共に客船を以て日本に渡り土帝の御親書及び勳章を持參すべく、其の一行為新嘉坡へ歸還するを待つて再びエルトグロールは歸國の途につく事の許可を土帝に對し求めたのであつた。

然るに土帝は之れに對し、「歐洲各國の汽船は何れも其の季節を選ばず常に日本に往復しつゝあるのであるから吾が軍艦が之れを果す能はざる理由ありや」と詰問されたのであつた。然し海相が其の愛婿の身の上を憂へて土帝に上奏した通り、エルトグロールはコンスタンチノープルより新嘉坡までの航海の爲め船體著しく破損し、殊に前部の汽罐が甚しかつた。それ故修繕に必要な材料は市場に於て之れを購入し船大工を傭入れて木造の部分は之れを修理した。然し根本的修繕を必要とする汽罐室の重要な部分には何等手を觸れなかつた。それでギースルの日記にも「資金の缺乏からエルトグロールは新嘉坡に於ても其の修繕を爲す能はず不完全な汽罐を以て再び航海に旅立ち多くの困難と戰つて終に日本に到着し國書と勳章とを拜呈し將卒共に珍客として一ヶ月間(註一六)優遇されたが、歸國の途についてからは終に其姿を消して了つたのであつた。」云々(註一七)と云つて居る。

斯る間にも東洋諸國親善の宣傳は各地に試みられ、エルトグロールの寄港する各地には回教徒の群るもの黒山の如く、彼等は始めて見る土耳其軍艦の甲板上に狂喜し、船は宛然回教寺院の如く、其の甲板

上には終日祈禱が行はれ、軍艦内の樂隊は市内の目抜きの場所に於て進軍歌を演奏し回教徒は其の影に歡喜躍躍して居たのであつた。

三月十七日土國使節の一行は新嘉坡を出帆し二十日西貢に立ち寄り此所で八隻の支那艦隊に出會し、薪炭を購入し、直ちに一度は香港に向つて出發したが暴風に逢つて引き歸し、三十日再度西貢を出發した。其の後最初三日間は海上平穏であつたが四日猛烈い東北風に見舞はれ香港を去る八十海里の地點で隨分困難したが、是れは彼等の遭遇した第三回目の暴風雨であつた（第一回はスマトラ沖、第二回は西貢沖）當時オスマン・バシャは其部下統率の爲めに隨分困難したらしく當時の色々の逸話も其家庭に送つた手紙の中に書かれて居る。

香港に到着したのは四月四日であつたが、此所では英國官憲から多大の好意を受け當地碇泊の英佛司令官は何れも其の同國船にオスマン・バシャ一行を招待し、香港市長は出發當日祝砲を發射したり、其の他樂隊をして土國國歌を奏せしむる等充分満足させたのであつた。それ故オスマン・バシャは「この大旅行中知遇を得たる英國高官の中、新嘉坡アデン其の他香港の知事及び司令官サト・サムソンの好意に對しては充分に感謝する。然し其の他には人間味のある英人に一度も逢ふ事が出來なかつた事を驚く」（註一八）と書いてある。

彼等は香港に於て充分英國官憲の好遇に感謝しながら五月一日此の地を出帆し長崎に向つたが、其の

途中又々暴風雨に見舞はれ其の日夕方から吹き出した風は翌日午前二時になつて愈々猛威を振つた。附近には投錨すべき場所もなく、亦石炭も不足を告げて居たので方向を轉じて四十海里を距つる福州に着したのは五月四日であつた。福州では十日間滯在し二百噸の石炭を積み込んで、五月十四日愈々長崎に向つた。長崎を去る六百五十海里の地點で又々激浪に翻弄されたが不斷の努力の結果砂糖祭セケル・バイラムの第三日目（此年は五月二十二日に當る）終に船は長崎に到達する事が出來たのであつた。最初に日本を見た日のオスマン・パシャの日記には左の通り書いてある。

「砂糖祭の第三日目未明、予が第二中隊附一中尉の報告により上甲板に現はるゝや、エメラルド色の日本山々は遠來の客を迎へ、一同の歡喜例ふるに物なく、船は英米の汽船及び日本要塞に對する禮砲その他の爲め港内に碇泊し石炭を積載することゝした云々（註一九）と。

五月二十七日長崎を出帆し瀬戸内海に於てはボスフオラス海峡を偲ひながら一時間七海里の速力で三十日・月の無い夜の九時神戸港に錨を下した。此所に滯在一週間の内に船體を塗り換へ吾が宮内省と電報の交換をする等の事があつて六月五日神戸を出發したのであつたが、途中無事六月七日豫定の通り彼等土耳其使節は横濱へ入港する事が出來たのであつた。

尙ほ日本上陸後の彼等の行動について説明することは他日の機會に譲り今は之を略す事とする。

(註一) 日本に於て出版された佛文中 Eltegour と記して居るのは土耳其人の發音中の R を L と混同した爲めに生じた誤記であると考へる。

(註二) 紀州檍野崎燈臺の傍りにある土國軍艦遭難記念碑に五百八十一名と刻してあるのは誤りであると考へる。即ち遭難當時生存者中此種主計事務に精通せるものなく總員略六百五十名と云ふ概數を記憶し、其中より六十九名の生存者を引き去れば遺り五百八十一名となるを以て、其數を記したものであると思考する外ない。在來吾が國に於て官報、新聞、著書その他の報告に於て何れも五百八十一名と記載して居るのは、此所から出た誤記であると考へる。死亡者五百三十八名の内でも十五名は既に彼等が横濱碇船中コレラで斃れた事はオスマン・ベシヤの土國海軍省宛の報告書に見えて居るから、眞に紀州沖で没したのは五百二十三名となるわけである。

(註三) 土耳其國海軍省文書

(註四) 同 上

(註五) 回教徒の行ふ二大祭禮の一で、断食祭(ラマダーン)（毎年一回回曆第九月中三十日間の祭）の終る際に行ふのである。idi cherif と云ふのが阿刺比亞の本名である。土耳其实では俗に Seker Beiram (砂糖祭の意) と云つて居る。三十日間の断食の後に一週間甘いものを作つて之れを食し断食をやめる祭禮で、回教徒にとっては長い間待ちこがれる大祭禮である。

(註六) Schlieman Nataky: Ertgrul Frakateny Fadilhesy. Istanbul 1327 (1911 A. D.) 6 s.

(註七) 土耳其軍艦エルトグロール遭難追悼記第十六頁に大島村長沖周發兵庫縣知事林董宛具申書を載せ「同艦一千百噸一説には六千噸とあり、姑く記して疑を存す」と説明して居るが、土耳其实軍省記録によれば排水噸數二三四四と明記して居る。

(註八) 邦文記錄中には三十五歳とあるも同ベシヤは日本流に計算しても三十二歳であった。

(註九) 日本に於ける各種記錄に六百五十名と記するのは註一に説明せる如き理由による誤傳であると考へる。

(註一〇) 土耳其國海軍省文書

オスマンベシヤの横濱へ上陸する迄(内藤)

(註 11) Baron Wladimir Giesl: Zwei Jahrzehnte im Nahen Orient. Berlin 1927 S. 50

同著者は近東駐在武官として近東各地に二十年間駐在して居たが、一八八九年には彼は任土耳其にあり、當時旅行中であつた
との事であるが、其の二十年間の日記類を集め彼の没後一九一七年に出版したものである。

(註 11) Casit Bombey 1889. 10. 28 土耳其語譯による。

(註 11) Avocat of India, Bombey 1889. Oct. 29.

(註 14) 土耳其國海軍省文書

(註 15) 同 上

(註 16) 實は三ヶ月以上滯在したのであるがキースルは一ヶ月と誤記してゐる。キースルは此の事件に關し1頁半記載して居るが
此の外「... 111 ク所明なる誤りだ」と記して居る。

(註 17) Baron Wladimir Giesl: Zwei Jahrzehnte im Nahen Orient, Berlin 1927. S.50—51.

(註 18) 明治廿三年九月十四日附オスマン・ベシヤより其家庭に送れる書翰。

(註 19) オスマン・ベシヤが其家庭に送れる日記體書翰。